

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる



コンゴ民主共和国Son of victory
学校の子もたち。校長先生が、
セミナーに参加（2頁参照）

「今、起きていること」

油山シャロームチャペル 牧師 横田法路
(日本国際飢餓対策機構・理事)

先日、米国で発行されたChristianity Today誌(2013年7・8月号)に、ポスト3・11の日本についての特集が組まれていました。さまざまなインタビューを集めての記事でしたが、その中で特に印象的であったのが、聖学院大学の藤原淳賀教授による次のような論説でした。

「…震災前の日本の教会は、…“きよさ”を保つために社会との関わりをあまり持たない傾向にあった。しかしこの大震災後、教会は人々の助けとなるという動機の純粋さを保ちながら、救援活動に力強く携わるようになってきた。そのような働きを通して今日、日本のキリスト教会は、特に被災地において、未だかつてなかったような信頼を得てきている。」

このことは、私の個人的な体験からも裏付けられます。つい先日、福島県の三春町を訪れたときのことです。ある子ども集会で小さなお子さんを連れてこられた二人の婦人と会いました。一人の女性は、孫を連れていました。実は、その子の両親と弟はあの震災で一瞬のうちに津波にさらわれてしまい、彼女は一人残された孫を引き取って仮設住宅で暮らしているのです。もう一人は富岡町に住んでいた方ですが、原発事故のゆえに避難されて、仮設住宅に住

まわれ、最近ようやくアパートに引っ越された方でした。その方々がこのように言いました。「これまでいろいろな方に助けていただきましたが、いい方だなと思った方は、ほとんど教会関係の方でした。どうしてそのように良くなってくださるのですか？」私にとってこの嬉しい言葉は、確かに教会が人々のあらゆる必要に応えようと具体的に働きかけた故だと感じます。

もちろん、すべての教会、すべての善意の人々が被災地に直接行って被災した人々のお役に立てるわけではないでしょう。だからこそ、日本国際飢餓対策機構(JIFH)は、そのような方々の手足として、震災直後から被災地に入り、その地の人々に愛をもって仕えてまいりました。東北事務所も開設し、今もそうした方々との関わりを持ち続けております。どうぞ引き続きJIFHを通して、被災地の方々に関わり続けてください。また世界にも同じように支援を必要としている人たちが大勢います。あなたも、愛を届ける働きのパートナーになりませんか？

「あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ5章16節)

7月4日から3日間、コンゴ民主共和国のルブンバシ市内の教会で、VOCセミナー（共同体のビジョン研修）が行われました。当機構の駐在スタッフ、ジェローム・カセバが現地で地元教会の人々と共に準備し実現したもので、毎日約50名の参加者が集まりました。



自分が変わること、それが私の第一歩

講師のランディー師と通訳のジェローム JIFHから岩橋理事長も参加しました

講師は、昨年二ジェールでのセミナー同様、当機構の海外プロジェクトアドバイザーのランディ・ホーグ師（VOCF代表、元国際飢餓対策機構総裁）でした。地域教会の牧師を始め、長老、学校長、国内避難民のリーダーのパメラさんなどが参加されました。

セミナーでは、物の見方・考え方の変革の重要さと、そのためには自分から変わること、そして、地域が飢餓・貧困という困難に立ち向かうには、3つの核となる、地域のリーダー、地域教会、地域の家族が共同体として共にビジョンを持ち、協力していく必要があるということ学びました。この「私から始める、世界が変わる」の考え方に沿って、一人一人が地域を変えていけるよう、励ましをうけました。

変革の先駆者になりたい

「今までは教会の人たちのことしか考えていませんでした。しかし、コミュニティの人々のことも考えていく必要があることを学びました」。参加したマサング・ポリドール牧師の感想です。また教

会の女性リーダー、ナウエジ・クレマンティネさんは「一番心に残ったことは、まず自分が変わるということでした。今後は、女性たちとビジョンを共有して、コミュニティを変える先駆者として働きかけていきたい」と語りました。

隣国ルワンダからも参加者

またこのセミナーには、当機構が支援をしているルワンダのREACHからも2名参加されました。コンゴとルワンダという国同士の複雑な関係上、参加が一時危ぶまれましたが、結果、参加者からは、「ルワンダでの活動のことを学べてとても励まされた」という感想をいただきました。

参加した国内避難民グループのリーダー、パメラさんたちの村では、昨年12月に民族紛争があり40人が殺されたということです。パメラさんたちは命からがら、450km離れたルブンバシまで3週間かけて歩いて逃げ、136人がルブンバシにたどり着きました。当機構は、教会を通して食料などの支援、また彼らが教会に来るための車の支援を行いました。現在は、多くの人が他の村に行き

35名がルブンバシに残って、パメラさんの親戚の家で一緒に暮らしています。一時は、そこに90人が住んでいたそうです。教会の人々は、彼らを迎え入れてさまざまな支援をしています。私たちが参加した礼拝の後に、衣服の寄贈をされていました。



セミナーに参加中のパメラさん、当機構はこれからも支援を続けま

パメラさんは、「今回のVOCセミナーで一番学んだことを、私たちの仲間にも伝えます。今後は、共に農業プロジェクトをして自立できるようにしていきたいです。」と語られました。困難の中でも、自立していこうとするパメラさんの表情は希望に溢れていました。



当機構は、これからも現地教会を通して、コンゴ民主共和国の人々の自立のために協力をしていきます。皆さまの応援をお願いします。